

SOBA活動報告書

第13号



2016年3月

愛知教育大学教育学部附属教育臨床総合センター

SOBA とは

SOBA (Symposium of Bullying in Aichi) は、子どもの「そばにいる」ことを活動の姿勢とする、愛知教育大学の学生を主体としたボランティアグループです。愛知県内で相次いだ「いじめ」に関する事件をきっかけに始まった「いじめを考える会」を前身とし、現在は教育臨床総合センターの研究教育活動に、学生主体の活動として位置づけられています。

子どもの「そばにいる」という姿勢を具体化するため、子どもに近い「お姉さん」「お兄さん」の立場から、時には自分たち自身の「子ども」としての体験を振り返りつつ、リアルタイムで子どもが抱える問題について学んでいます。また子どもと関わりを続けるため大学外部との交流を進めています。活動にあたっては、弱い立場に置かれがちな人々の力を引き出す「エンパワメント」、仲間同士の支え合いを意味する「ピア・サポート」などのキーワードによる学習やコミュニケーションのトレーニングにも取り組んでいます。

主な活動に、毎週の「例会」での学習会の実施、地域で子どもに関わる教育機関や NPO 関係者を招いた拡大学習会、地域の教育機関や NPO で子どもと触れ合う活動（プログラムの考案や実施）があります。また、愛知教育大学大学院の学校教育臨床専攻の方々とも連携し、新たな取り組みを進めています。

もくじ

はじめに	01
第Ⅰ部 活動報告	
1. 例会	05
2. 拡大学習会	10
3. キッズクラブへの参加	13
4. 教育臨床カフェ	15
5. 不登校・学びネットワーク東海との交流	17
第Ⅱ部 メンバー活動報告	
大学院生	21
4年生	21
3年生	22
2年生	24
1年生	26
第Ⅲ部 資料	
教育臨床カフェ チラシおよび資料	29
キッズクラブ製作物	32
学習発表会 プレゼンテーション資料	33
いじめと自殺の社会学	34
おわりに	41

はじめに

代表 伊藤江里奈

今年度は前年度までと比べて、SOBAの活動環境が大きく変わった年だったと感じます。

まずは教育総合臨床センターの改修工事です。主な活動場所としてきた教育総合棟の改修工事により、SOBAの活動場所が昨年度新しく建った教育未来館に臨時に移転しました。前期末にはSOBAのメンバーも引っ越し作業に追われ、無事後期からは新しい場所で、新鮮な気持ちで活動をしています。次に大学院の先輩方との関わりが増えたことです。教育未来館に活動場所が移転したことにより、院生の先輩方が例会に来てくださることが増えました。私たち学生だけでは出なかったアイデア、私たちにはない経験を持つ先輩方から、多くのことを吸収できたように思います。最後に、昨年度から行っている教育臨床カフェの活動の発展です。普段SOBAの活動には参加していない、もしくはSOBAのことを知らなかった人も多く参加して下さるような、活発な会に成長しました。来年度以降も、さらに積極的に活動していきたいです。

また今年度も多くの新入生を迎えることができ、うれしく思います。例会では違う分野を学ぶ学生から様々な意見を聞けるため、充実した時間を過ごすことができています。

そんな新入生の要望もあって、今年度は特に発達障害に重点をおいてディスカッションを行いました。学校現場で発達障害に関連して、生徒指導や教育相談に関する課題に出会ったら、教員はどのように対応をすればよいのか。どの意見も子どもを守るためには大事なことでした。このディスカッションがさらに活気のあるものにするために、来年度も各自が学びを深めていきたいと考えています。

2015年度のSOBAの活動をこの報告書にまとめました。報告書を作ることによって得ることのできた成果、また見えてきた課題を来年度に生かし、よりよい活動を行っていきたいです。また、この報告書が皆さんにとってSOBAの活動を知るきっかけとなり、これからもSOBAの活動にご理解とご協力をいただくことができれば幸いです。

第 I 部
活動報告

1. 例会

1.1. 新入生との交流

①アンゲーム

「UNGAME(アンゲーム)」とは自己表現ゲームの一つです。見た目は双六のようなボードゲームですが、勝ち負けやゴールなどはありません。ゲームの時間も参加者全員で決めるなど、自由度が高いことが特徴です。

ボードには、「もし、あなたがどこかに逃げ出したい気分であれば(ボードに描かれているイラストの)ヨットに乗ってください」といったその時の気分を尋ねるマスや、ボードの中央に積まれたカードを引いて質問に答えるマス、他者が質問に答えた内容などに対してメモしておいたコメントを読み上げるマスがあります。コメントのためのメモには、自分だったらカードの質問にどのように答えるかということや、その答えを聞いて感じたこと、更に質問したいことを書いておきます。ここでの唯一のルールは否定的なコメントは書かないことです。

今年度も、新一年生と SOBA のメンバーでアンゲームを行いました。SOBA のメンバーは昨年度のゲームの思い出を懐かしみ、新一年生は未知のゲームに少し緊張している様子でしたが、バラエティに富んだカードの質問などに最後にはみんな、笑顔がこぼれていたと思います。アンゲームでは今まで知らなかったその人の一面などを知ることが出来るので、コミュニケーションをとる良いきっかけとしてなります。未経験者にはもちろん、経験者にとっても面白い体験が出来ると思うので、来年度もアンゲームを行えたらいいなと思います。

②視覚のトレーニング

今年度は、新入生歓迎会のまえにソーシャルワークの技術を磨くトレーニングを体験してもらいました。5から6人のグループを作り、その中から観察者を一人選出します。観察者は残りのメンバーを1分間観察します。この時残りのメンバーは動かないよう努力してください。1分間の後観察者は目を伏せます。残りのメンバーは、その中の一人の身体の一部を変化させ観察されていた時の姿勢に戻ります(例えば服のボタンを一つ外すなど)。観察者がその変化を回答するトレーニングです。

このトレーニングは自分の中の感覚を呼び起こさせるものです。コミュニケーションをとるときは、話の内容だけでなく相手の纏う雰囲気なども他者理解に重要な役割を果たします。その意味で、自分の中の感覚に気付くという実感は大事なのではないかと思います。それだけでなく、このトレーニングはゲーム感覚でできて大変楽しく、難しい変化に気付けたときの喜びは大きいものでした。今まであまり交流が無かった新一年生と SOBA のメンバーも和気あいあいとした雰囲気で、来年度も取り組みたいと思いました。

1.2. いじめ伝言板・明日が来る

朝日学生新聞社発行の朝日中学生ウィークリーには、いじめた・いじめられた体験やいじめの悩み相談、いじめに関する意見などが掲載された「いじめ伝言板」と、過去の「いじめ伝言板」をもとにしたフィクションである「明日が来る」という漫画が掲載されています。前期の例会ではそれらを取り上げ、メンバーで意見交流を行いました。自分以外の人の考えを聞き、全員で共有することで改めていじめという問題を考える良い機会になりました。

2014年11月23日版の朝日中学生ウィークリーの「明日が来る」では、部活でいじめにあった少女の漫画を取り上げました。少女は部活で仲間外れにされました。顧問の先生に相談しても何の解決にもならず、仲間外れの状況は変わりません。ある日授業でいじめの番組を鑑賞することになります。はじめはビデオなんて何の参考にもならないとあきらめていた少女でしたが、ビデオの中の「苦しい時は家族に……」という言葉が印象に残りました。その言葉に後押しされた少女は、帰宅後母親にいじめにあっていることを話します。そして母の言葉を支えに悩みを解決する為に一歩行動した、という内容でした。

この漫画を読んで、まずは2グループに分かれて感想の共有をしました。その次にグループで出た意見を全体で共有し、話し合いました。意見共有では、まず漫画を読んだ各自の感想を好き好きに話し合いました。自分が中学生だったころのことを思い出し、体験に基づいて少女の気持ちに思いをはせたり、いじめが起こりやすい時期、環境についての意見が出てきたりしました。

また、顧問や担任の対応がおかしいのではないか、という意見が多くありました。せっかく勇気を出して相談したのにいじめが解決していない、顧問の先生が何もしないまま担任の先生にまわす理由が分からない、という厳しい意見が多く出ました。担任の対応も道徳の授業でいじめのビデオを見せることにとどまっただけで、もっと直接的に介入すべきではないか、という意見もありました。そこで顧問の先生や担任の先生の対応の問題点を挙げていき、どのような対応が望ましかったのか議論しました。その中で出てきた意見の一つに、先生もどうしていいのかわからなかった可能性もあるので、先生たちへの支援やいじめについての教育を為す必要もあるのではないかとありました。いじめの問題には正しい知識を持って、適切に対応し、時には他の人・機関と連携して取り組むことが大事であると思います。そのため、『支援者支援』を行うことが、今後の課題の一つであると考えました。

また、顧問の先生は女の子に相談を受けるまでいじめに気付いておらず、それが問題だという指摘も出ました。だからまずは部活の時間に顔を出すことなどを心がけ、いじめに気付くことのできる環境を作ることが大切だという意見が出ました。そして、女の子に相談を受けた時に、しっかりと話を聞くべきだったという結論に至りました。具体的には、いじめの背景を理解するために色々な立場の子どもから状況を聞くこと、本人は部活をや

めたいか、やめたくないのかという意味を確認すること、心当たりや原因を探ること、などが挙げられました。

担任の先生との連携を図ることの重要性も話し合いました。この漫画では、顧問の先生が担任の先生に対応を押し付ける形になってしまいましたが、もし女の子が部活を続けたと言ったとしたら、部活・クラスの両面で彼女を支えていかなければいけないので、しっかりとした対応体制を整えるべきだった、という意見が出ました。

もう一つの今後の課題として、仲間はずれにした部活の少女以外の部員への働きかけが上がりました。漫画では、仲間外れにされた少女はひとまず自らの力で苦しい思いから逃れましたが、いじめた側へのアプローチについては触れられていません。いじめた側へのアプローチが適切になされていない場合、再びこのような問題が起こりうる可能性があります。顧問の先生を交えて、いじめた側へのアプローチをし、問題を根本的に解決すべきであるという案も大切だなと思いました。

様々な考えが出ましたが、いじめの問題はまず相談することが大事であるということがSOBAの意見としてまとめられました。一人で抱え込まないで親、友人、教師、相談室、どこでも誰でもいいから相談することが第一歩です。意見交流をすると、正答が無い中で議論を交わすので、自分の考え方の幅が広がっていくことを実感します。将来学校現場で働く人だけでなく、多くの人にこの経験をしてもらいたいなと思いました。いじめ問題には対応の仕方に正解がありません。だからこそ、私たちはいじめについて常に考え続けていく必要があると感じました。

1.3. 事例検討

後期からは、発達障害を持った子どもが学校生活を送る中でどのような壁にぶつかるのかを事例を用いて考えました。今年度は教育臨床カフェや拡大学習会で発達障害について取り上げることになっていたため、長い時間をかけて事例検討を行いました。

取り上げた発達障害は、自閉症スペクトラム、LD(学習障害)、ADHD(注意欠如多動性障害)です。ミネルヴァ書房出版の『ふしぎだね!?自閉症のおともだち』『ふしぎだね!?LD(学習障害)のおともだち』『ふしぎだね!?ADHD(注意欠如多動性障害)のおともだち』という本から学習しました。これらの本は事例を紹介する短い漫画と解説が交互になっています。私たちは最初に漫画だけを見て、子どもが困っていること、その時の気持ち、教師や周囲の人たちが出来る対応など漫画から気づいたことや感じたことをグループで話し合いました。意見を全員で共有した後解説のページを読み、自分たちが出した意見と比較したり、発達障害やその特徴を持つ子どもが学校生活を円滑に行うための一つの方法を学んだりして、更に発達障害に対する認識を深めました。

私たちはまず本人の思いを考えることをすることから始めることで、問題行動を矯正するという視点ではなく、その行動の意味を考えることが出来ました。障害ゆえの苦しみにも目を向けることが出来たと思います。また、本人の気持ちだけではなく、周囲の友達の気持ちも考え、集団生活における課題についても考えました。

そしてどういった支援をすることが出来るかを考えた際は、非常に多様な意見が出てきました。本人に対してのアプローチはもちろん、環境整備や学級に対しての働きかけなど多面的な支援が考えられました。本人や周囲の人の気持ちを考えた上でも支援方法だったので、本人が生活しやすいことが中心になっていたと思います。

話し合いの際には、自分の臨床経験や幼い頃の体験を基に話をしてくれた人も多くいました。そのため、架空の事例ではあってもより親身に考えることが出来たと思います。自分が悩んだ経験の解決の糸口になったようにも感じます。

これから現場を目指すメンバーにとって、発達障害の子どもについて考えることは非常に大切なことであると思います。世間一般でも発達障害という言葉はよく聞くようになりましたが、偏見を持たれやすいというのも事実です。こういった事例検討を通して、本人の気持ちや正しい知識を理解することが私たちにとって大切なことです。また、知識を得るだけでなく、自分たちで考えるということがより深い学びに繋がっていくと思います。

また、今年度の例会参加者は概して少人数だったため、全員で話し合う機会が多く、グループごとの意見の特色が顕著に表れることは昨年度程多くありませんでした。しかし3年生や大学院生の方が実習などでの体験談を多く語ってくれたので、より身近で新鮮なものとして発達障害をとらえることが出来たと思います。これからも発達障害を含め、様々な分野についての学びを深めていきたいと思っています。

1.4. 学習発表会

昨年発表できなかった 2 年生が関心のある内容についての調べ、発表を行いました。発表した内容は「中野富士見中学校鹿川裕史君いじめ自殺事件」についてです。巻末に使用したスライドを掲載します。

非常に複雑な事件について発表してもらいました。いじめ自殺という非常に重いテーマでしたが、そういった事件について正しく理解することは必要なことであると感じます。こういった重篤な事件があることを踏まえて、いじめ問題について考えていくべきであると思いました。

2. 拡大学習会

①個性の強い子どもを地域で支える会 代表 出口咲織さんを招いて(2015年11月17日)

1. 「個性の強い子どもを地域で支える会」とは

豊田市を中心に、知的な遅れがない発達障がいを含む「個性の強い子ども」を理解し、支援したい人が集まっている会であり、月に一度、おしゃべり会を開いての交流や、講演会などを行っています。

2. お話の内容

事前に SOBA のメンバーで質問したいことを伝えておき、それに答える形でお話をしてもらいました。

・どんなことに苦労しているか

小さい頃は、主に身辺自立が大変であること(TPO に合わせた服装をするなど)。学校が始まると、勉強や集団生活など、大変なことが増える(規律が厳しくなることや、子ども同士の関係づくりなど)。特に勉強は具体的に数値化されるようになるので本人の負担にもなる。

・発達障がいをどうとらえているか

「障がい」というより、個人の特徴・個性であるとらえているが、保護者によってはショックを受ける人もいる。「この子にはこう育てほしい」という希望通りにいかないことが増えるため、喪失感を感じる人も。

・今後学校がどのように変わっていくことを望むか

「子ども本人にとって」良い教員であってほしい。個人に合わせて、一人ひとりを大切にしてほしい。また、発達障がいの子どもは平和主義の子どもが多く、誰かが怒られているのを見るとつらかったりする(みんなに優しい)ので、障がいの有無に関わらず、怒鳴ったりするのではない指導を心がけてほしい。

・親からみた養護教諭

養護教諭は身体の相談(おねしょ、けが、爪噛みなど)のときには相談をするが、あまり関わることはない。しかし、担任は毎年変わるのに対して養護教諭は変わらないので、子どもを経年的に見ることができる。また、高校になると、担任は子どもと関わる時間が減る。そのときに養護教諭が各教科担任の間をつなぐ役割をしてくれることがある。

・父親の協力はああるか

父親は働いていることが多いので、どうしても父と母の情報量に差が出てくるので、ふたりでゆっくり話す時間を設けることが大切である。また、父親自身も発達障がいであることがある。その場合、本人は頑張っていて今まで生き抜いてきたので、それを子どもに

押し付けてしまうことがあるが、そこは押し付けるのではなく、理解していかなければならない。

この他にも、実際に発達障がいの子にはありがたいグッズなどを実際に持ってきていただいて、触れさせてもらいました。時間を視覚的に認識することができるタイムタイマーや、雑音をシャットダウンするイヤーマフ、LDの子が本の音読をしやすくするものなどがありました。

SOBA では今年度、発達障がいについて関心をもって取り組んできました。今回、実際に活動されている方を招いて生の声を聞くことができ、貴重な経験をさせていただくことができました。

②「ひかりっこ」の実習体験報告 林萌先輩を招いて（2015年11月24日）

愛知教育大学大学院生（教育実践研究科）の林萌さんをお招きして、こども発達支援センターひかりっこでの実習で林さんが得たことをお話ししていただきました。

- ・こども発達支援センターひかりっこは「発達支援」と「家族・母子支援」の大きな柱の元に活動しています。特徴としては「統合保育」「医療ケアの充実」「広域支援」が挙げられています。
- ・子どもに伸ばしてもらいたい力を明確にしており、それに沿った対応や支援をしています。（例）身辺自立の力…全ての子どもにトイレトレーニングをさせておむつを卒業させる、人間力…「楽しいね」「悲しいね」などと話しかけて感情を教える
- ・安全面の管理では、ハサミやペンを子どもの手の届く場所に置かないようにするなど、子どもが危険にさらされないように徹底をしているようです。
- ・統合教育ということで、障がい児と健常児と一緒に生活していますが、介助者の補助もあり、ともに発達段階的な激しい差を感じず生活している様子だったようです。しかし、全ての場において統合することは困難であるようです。
- ・子どもだけでなく家族のケアも大切にしている、連絡帳や子どもの送り迎えを通して家と学校の繋がりを形成しています。

林さんからひかりっこについてのお話を聞いて、障がい児への支援や統合教育の実体を垣間見ることができました。障がい児の支援には多くの課題もあります。その課題には進学する際の引き継ぎの不十分さなどが挙げられます。このような課題をひとつひとつ乗り越えていくことが支援の更なる向上に繋がります。支援者は、子どもの将来を見据えて、いま彼らに何ができるかを考えながら対応していくことが大切であると学びました。

最後になりますが、今回貴重なお話をしてくださった林萌さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。

3. キッズクラブへの参加

【キッズクラブについて】

キッズクラブとは、小学生から中学生の子どもを対象とした刈谷市の子育て支援事業であり、市内のNPO法人「子育て・子育てNPO スコップ」によって運営されている。SOBAは、毎年キッズクラブに1、2回分のプログラムを準備し参加している。今年は、SOBAのメンバー5人で参加した。(巻末「資料」に当日の製作物などの写真を掲載しています。)

【日時・場所】

2016年1月9日(土) 10:00~11:30 刈谷市総合文化センター

【全体の様子】

幼児から小学生まで幅広い年齢層の子どもたちが参加してくれた。どの製作物に対しても意欲的に取り組んでいた。製作過程でうまくいかないときもあった。そんなとき、SOBAのお姉さんやお兄さんが、子どもの目線から優しく助言をしていた。そして、作品ができたとき、ある子どもが、「できた」と嬉しそうにつぶやいた。子どもが製作しているとき、SOBAのメンバーは、子どもの活動を見守りながらも、子どもが困っていたときには、適切な助言をしていた。そのため、子どもたちの笑顔が多く見られた。

【活動内容】

今回は、5つの工作を用意した。

□ かっこいい空気砲

材料は、チップスター(短い)の空き箱、ビニールテープ、風船、持ち手部分の空箱である。空箱にカッターで穴をあけたり風船を膨らましていたり工作に熱中していた。

□ けん玉

材料は、紙コップ、わりばし、いらない紙、ひも、ビニールテープである。作ったけん玉で楽しそうに遊んでいた。

□ 迷路

材料は、CDケース、画用紙、モール、BB弾、ボンド、のりである。自分だけのステージを考え、BB弾の動きを予測しながら作製していた。

□ 的当てゲーム

空気鉄砲で的当てゲームをした。子どもたちは、楽しそうに的当てゲームをして遊んでいた。友達と協力して一つの的を狙っていたり、倒した数を競っていたりと楽しく遊ぶ姿が見られた。

【参加したメンバーの感想】

- 子どもと一緒に工作をしながら積極的に話すことができたのでよかったです。みんなすごく器用で、私たちが手伝わなくてもやり方を教えるだけで作れていたのですごいと思いました。自分の作ったおもちゃで楽しく遊ぶ子どもたちを見て嬉しい気持ちになりました。

- 初めてのキッズクラブで、子供たちと上手く話せるか不安でしたが、好奇心旺盛な子供たちで自然と仲良くなることができました。一緒に作ったおもちゃで楽しく遊んでくれているのを見て、私も嬉しくなったし、参加してよかったと思いました。

- 小学校低学年の子どもと関わる機会が多かったです。最初、私だけではなく子どもたちも緊張している様子でした。しかし、時間が経つにつれて、子どもとの心の距離が縮まり、自分自身が落ち着いてコミュニケーションをとることができました。活動では、工作するだけではなく、空気砲を使って的当てゲームをするなど楽しい時間を過ごすことができました。的当てゲームでは、倒れない的があったとき、諦めないで、的をねらい続ける子どもの姿を見て、必死に応援している自分がいました。あっという間に時間が過ぎた感覚です。それだけ、子どもと共に楽しく活動ができたからだと思います。活動の振り返りを通して、改善すべきことは改善し、来年のキッズクラブに活かしていきたいです。

- 最後のキッズクラブでした。あまり準備に参加できませんでしたが、みんなの協力のおかげで終えることができました。子どもも喜んでくれ、笑顔で遊んでくれたのでよかったです。反省点としては、準備をする人と当日来られる人が違い、戸惑うことが多かったことがあげられます。次回からは全員が準備に携わり、みんなが不安なく当日会場に迎えるようにすれば、もっと良いものになると思います。

- 今日のキッズクラブに参加してくれたのは全員女の子だったということもあってか、終始ゆったりとした時間が流れていたように感じた。中盤に、複数の子どもと同時に工作をする時間があった。どうしても作業が得意な子と不得意な子に差がつき、私は不得意な子に注意が行きがちになってしまった。また同じような状態になったときには、作業が速い子どもが暇だと感じる時間がないように目を向けて工夫をしたい。

4. 教育臨床カフェ

教育臨床カフェとは、愛知教育大学教職大学院教育臨床専攻の学生と SOBA との共同活動の総称です。今年度も引き続き活動を行い、2回のイベントを企画・開催しました。

【2015年5月22日開催】

今年度の教育臨床カフェ 1 回目は「スマホと教育 子どもにスマホの使い方をどう教えますか?」というテーマで行いました。前年度からの引き続いての3回のシリーズもので、今回は第3回目でした。

第3回目は、SNSの利点や欠点についてのプレゼンから始まり、その時にスマホを用いたワークを行いました。ワークは、ある企業のロゴだけを提示し、そのロゴを頼りに企業名を探し出すというものです。最初は、参加者の方々は見たことのないロゴに戸惑っている様子でしたが、皆さんの検索能力は高く、五分もたたず正解にたどり着くと言う素晴らしい結果を残していただきました。出題した側からすれば、本当に無念でした。

その後、刈谷市で取り組まれている「夜9時以降のスマホの利用禁止条例」について4人ほどのグループに分かれてディスカッションを行いました。条例についての意見や、実際に教育者としてどのようにスマホなどの SNS の使い方を教えるのが望ましいのかなど様々な意見を交換することが出来、20分では話きれないほどに盛り上がっていたように思います。

臨床カフェは、SOBA のメンバーだけでなく、愛知教育大学の他の学生や大学院生、教員の方も参加して意見を交わせる貴重な場で、たくさんの学びがあると思います。今後もこの活動は大事にしていきたいです。

【2015年11月11日開催】

教育臨床カフェ今年度 2 回目は、「発達障害」をメインテーマに、「あなたの知らない臨床の世界～教室で使える！発達障害入門」と題して講演会方式で行いました。今回は大々的に広告を行い、教員養成の学部生、院生のみなさんに広く参加していただけるように取り組んでいきました。結果、以前よりも多様な分野の学生に参加していただきました。

今回は、愛知教育大学障害児教育講座講師の飯塚一裕先生をお迎えした講演会と、そのあとにグループディスカッションを行う二部構成をとりました。

一部では、発達障害の基礎的な知識と先生が実際にかかわった発達障害の子どもの事例について教えていただきました。さらに、学習障害を抱えた人から見た視点（文字の見え方）や、不器用とされる特性を持つ人にとって一つ一つの作業がいかに難しいかを体験してみるという場面もありました。そのような障害を抱える子どもたちと接していくにあた

って、子どもたちがどんなことに困難を抱えていて、どんな支援が必要なのかを考えることが重要で、そのためには障害への知識は必要不可欠です。今回の講演会は、今後より発達障害の知識をつけるとてもよい契機になったと感じます。

二部では院生の方主体で、グループディスカッションを行いました。学校現場でみられる、発達障害と思わしき児童に対しての対応について、具体的な場面を仮定してディスカッションを行いました。学校において、発達障害の特性が、クラスの中で問題になってしまうことがあります。今回はそういった点を考えました。学部生、院生がともに話し合う場が得られ、学部生では考えつかないような考えを共有することができ、とても有意義な時間となりました。発達障害の傾向がある子どもがクラスの中で、クラスメイト達と楽しく学校生活を送れるようにするには、担任が学年主任や、前学年時の担任と情報を共有し、ともに支援体制を作っていく必要があります。加えて、クラス全体でのルール作りを行うことで、クラス内の問題を抑えることができるのではないか、という意見も出しました。

一部、二部を通して、発達障害への関心を高めることができました。実際の事例を教えていただいたり、ディスカッションを行うことで、発達障害がいかに身近にあって、教師に求められる対応がいかに重要かを知るきっかけにもなりました。発達障害を抱えている、またその傾向がある子どもと接していくために、今後より知見を広める活動ができればよいと考えています。

前年度の課題であった、来場者を増やすという点はかなり達成できたように思います。今まではポスターの掲示が主でしたが、今回はそれに加えプリントの配布活動などを幅広く行い広報活動に力を入れました。さらに、発達障害というテーマを「教室で使える！」という点から広げていくことで教員養成課程の学部生の参加を促しました。しかし、今回は院生の方の参加のほうが多く、学部生（特に教員養成課程の）の参加は多いとは言えなかったため、今後学部生にも興味を持っていただけるような「教育臨床カフェ」を計画していきたいと考えています。加えて、院生の方々と SOBA のメンバーとの連携をさらに深め、院生と学部生の意義のある交流の場を提供できるよう努めていきたいと考えています。

5. 不登校・学びネットワーク東海との交流

2015年5月24日に東山動植物園で不登校の子どもたちと関わるボランティアに参加させていただきました。東山動植物園での屋外交流会は、「不登校・学びネットワーク東海」が主催となって行われたものです。

「不登校・学びネットワーク東海」とは、不登校の親の会やフリースクールなどにかかわっている個人が出会い、生まれた団体です。ネットワーク内で多様な意見や情報を交流しあうとともに、不登校の子どもや親が手軽に情報にアクセスできるような取組みを進めています。

今回は、SOBAのメンバー8人が、ボランティアとして屋外交流会に参加させていただきました。午前は自由に園内を回り、全員でシートを広げてお弁当を食べました。午後からは親御さんたちは交流会をし、私たちは子どもたちと一緒に園内を回りました。

「不登校・学びネットワーク東海」のイベントの中で知り合った子ども同士が一緒に回っていたり、同じ学校の友達と一緒に来てくれた子どもたちもいたり、子どもたち同士の関わりも感じながら参加することができました。

【参加者の感想】

- 最初はあまり子供達と話すことができなくて不安だったけど、お昼ご飯の後から少しずつ話せるようになって、よかったです。
子供と触れ合う機会があまりないので、今日は本当に良い経験ができたと思います。
機会があればぜひまた参加したいです。
- 子どもたちがとっても明るくて楽しかったです！
不登校と聞いていましたが、子どもが想像したよりずっと元気で、一見すると普通の子と何も変わらないように感じました。
私個人、不登校の子の支援に何かできることならなんでもしたい想いです。
今日の活動に少しでも力になれていたら幸いです。
機会があればまたよろしくお願ひ致します！
- 話しかけて、こころを開いてくれる子とは仲良くなることができ、楽しんでもらえたようで良かったです。わたしも一緒に楽しめました。
話すのが苦手な子とはどう接していいかわからない部分もあり、勉強が必要だと実感しました。
でも、いい経験ができて良かったです！

- 子どもたちが思いっきり走ったり、植物園の植物をじっくりと鑑賞したり思い思いの形で東山動物園を楽しんでいた姿がとても印象的でした。1日で初対面の私たちに心をひらいてもらえるかはとても心配していましたが、楽しそうな笑顔を見ることができたのは本当に良かったです。
また、小中高生にとって大学生はあまり話すことのない存在だったと思うので大学生活についていろいろと聞かれ、私の話に対し、興味深そうに聞いてくれました。微力ながら彼らにとって珍しい、良い思い出となっていれば幸いです。
このボランティアに参加したことはとても良い経験となりました。ありがとうございました。
- 子どもたちとたくさん関わって楽しかったです。
元気な子とか、面白い子とか、色んな子がいて、みんな素直で可愛かったです。
ありがとうございました。
- まず何よりも楽しかったです。
子どもたちが抱えているものや、問題がわからない分、話していても（学校の話などは特に）これは触れていい話題なのかなどが気になりました。何も知らない大学生だからこそその関わり方ができたのはよかったですと思いますが、もしかしたら触れて欲しくないことに触れてしまったかもしれないと思うと、怖さや申し訳なさがあります。
しかし、アスペルガーの子が、最初は見向きもしてくれなかったのですが、最後の方には少し話してくれるようになり、うれしかったです。
- 私は前年も不登校・学びネットワーク東海さんのこの活動に参加させていただき、2度目の参加でした。少し不安はありましたが、子どもたちの元気な姿を見て、緊張せずに子どもたちと関わることができました。
普段の学校生活ではなかなか子どもと関わることはないので、子どもたちとの関わりの中で多くのことを学びました。どういう思いでこの子たちは日々を過ごしているのか気になりました。このような機会が子どもたちにとって良い刺激になってほしいです。
今回の活動で自分が何かこの子達のためにできることはないかと考えさせられました。もし機会があれば親御さんたちの思いも聞いてみたいと思いました。

第Ⅱ部
メンバー活動報告

真剣さあり、楽しさありの SOBA 活動 大学院 1 年 飯田康太

私は今年度、教職大学院に入学し、授業づくりや学級づくりなど教師としての実践力全般を学びながら自分の実践研究の課題を温めてきた。後期からは週 2 回、一つの学校に継続的に関わる「学校サポーター」活動に参加している。また学校以外の場でも、困窮する家庭の子どもを対象にした学習支援の活動（名古屋市）にも参加するなど、多様な場面で子どもと接する活動に取り組んできた。

そのなかで、去年の 9 月から SOBA に参加し、発達障害のある子どもの支援、福祉施設のことなど教育だけでなく福祉の分野についても学習することができた。

SOBA での活動を通して、数多くの学びを実感できた。SOBA での学びを 3 つ述べる。

1 つ目は、前述の学校サポーター活動でかかわる子どもたちの指導や支援に活かすことができた。私はサポーター活動で出会う子どもたちを思い浮かべながら、SOBA の例会に参加するようにしていた。例会では、主に発達障害のある子どもの支援や指導についてメンバーの考えを共有した。その学習を通して、今までの自分にはなかった考えや見方を学ぶことができた。そして、その学びを学校サポーター活動で実践し、子どもの笑顔につながったと実感できた。

2 つ目は、SOBA のメンバー、福祉施設で実習をした院生さん、川北先生から意見や考えを聞くことを通して、今までの自分になかった考えや見方を知ることができた。SOBA の活動では、多くの人との出会いが

あった。SOBA の活動で、外部の方が話してくださったことは、現実的な考えや意見ばかりであった。そのため、自分の考えを見直すこともできた。SOBA で出会った人とのつながりをこれからも大切にしていきたいと考えるとともに、これまで以上に、自分自身の考えを積極的に SOBA で発信していきたいと考える。

3 つ目は、楽しい学びである。例会では、発達障害について学習したり、外部の方にお話をして頂いたり学習が中心的な活動であった。しかし、時には、キッズクラブの準備のため、みんなで身近な物を活用して、空気鉄砲や迷路、剣玉を製作したときもあった。一人ひとりのメンバーの特技に魅了されたり、作品が完成したときの喜びを共有したりとメンバーと共に過ごした時間がとても楽しかった。

まだまだ、SOBA について知らないことばかりである。しかし、SOBA での活動を通して、学んだこと、経験したことを大切にしていきたい。そして、SOBA が、今よりも発展できるように自分にできることをしていきたい。

SOBA での 4 年間を振り返って

4 年 濱田奈歩

入学式の日、SOBA のチラシを見つけ「私のやりたいことはこれだ！」と思って SOBA に入ってから、あっという間に卒業を迎えてしまいました。SOBA での 4 年間は、私にとって大変良い経験となりました。

1 年生の頃は、人数も少なく、こぢんまりと活動をしていました。しかし活動の中で、実習などで様々な経験をされてきた先

輩の話を聞き、経験も知識もなかった私にとって基盤となるものが出来上がってきました。そして2年生になり、後輩がたくさん入り、活動の幅が広がりました。人数が増えたことで、話し合いもさらに活発になりました。3年生になってからは、実習やボランティアで現場に出ることが増え、SOBAで学んだことを活かすチャンスがたくさんありました。その一方で、学んだことや理想を現場で実現させることには限界もあること、現実はまだ厳しいものであることを感じました。4年生になってからは、実習や教員採用試験もあり、なかなか例会に参加することができませんでした。しかし、採用試験の対策をする中で、いじめや不登校、発達障がいに関してSOBAのメンバーと考えることが生きてきました。

また、SOBAを拠点に、様々な人と出会ったことも、私にとって大きな財産となっています。講演に来てくださったNPOの方（NPO法人 子育て・子育ちNPO スコップ）とのつながりで、ピアカウンセラー養成講座に参加したり、中高生の居場所作りに携わることができたりしました。そこからまた新たな人との出会いがあつて、様々な方のお話を聞くことができ、考えの幅が広がっていきました。SOBAには、ボランティアや講演の情報がたくさん入ってきますが、きっと、SOBAに入らずに大学生活を送っていたら知ることができなかつたと思います。本当に、SOBAに入ってよかったと思える4年間でした。

私は4月から、養護教諭として働きます。学校で実際に働くと、様々な問題を抱える子ども、悩みや不安を抱える子どもと出会うことと思います。そのときは、SOBAで

学んだことを思い出しながら、全力で、子どもと向き合っていきます。

最後になりましたが私が4年間SOBAで良い学びができたのは、川北先生を初めとする先生方、一緒に活動してきた先輩、後輩のおかげです。4年間、本当にありがとうございました。後輩のみなさんが、今後も、SOBAでよりよい学びができるよう、応援しています。

SOBAでの活動を振り返って

3年 佐野朱里

1年間のSOBAでの活動を通して、一番印象的だったのは、東山動植物園でのボランティアです。私は1年生の時にSOBAに入りましたが、SOBAのメンバーとして学外の活動に参加するのは初めてでした。

不登校の子どもたちと接する機会は決して多くはなかったため、子どもたちと顔を合わせる前に、私はとても緊張してしまっていました。しかし、実際に子どもたちと会い、一緒に園内を回りながらコミュニケーションをとる中で、子どもたちのことを「不登校の子どもたち」というイメージを強く持ってしまうことに気付きました。子どもたちや、親御さんたちとの会話を楽しむうちに、ひとりの大学生のお姉さんとして、子どもたちと関わることもできるよう感じます。

もちろん、学校の話をしていいのか、触れてほしくない話題があるのではないかと、不安も多くありました。しかし、ボランティアをした一日を通して、私は人と話すことが好きなんだ、子どもと関わるのが好きなんだということに、改めて気付くこと

ができました。それが、SOBA に入りたいと思った原点であったと思います。

私は、不登校・学びネットワークさんのような団体と関わった経験も少なかったため、地域にある団体・グループと SOBA との交流の機会に立ち会うことができ良かったです。これから、地域で SOBA としての活動が増えてくると、学びも深いものになってくるのかもしれないと思いました。

今年度は例会に参加できないことが多く、子どもたちが抱える様々な問題について、メンバーと話し合う機会はあまりありませんでした。来年度は 4 年生になり、忙しくなるとは思いますが、上手く時間を作りながら例会へ足を運び、ディスカッションにも参加したいと思っています。

SOBA での一年間を通して

3 年 松下夏子

SOBA での活動も 3 年目に入りましたが、今年も非常に充実した一年でした。臨床福祉心理コース以外のメンバーが入ったり、外部の方のお話を聞く機会が多かったりと、学びの多い 1 年であったと思います。

3 年生になり、授業等で発達障害や課題を抱えた子どもたちと関わる機会が増えました。そういった臨床での経験において悩むことも多くなっていました。しかし、SOBA で検討会を行ったり、教育臨床カフェで講演を聞いたりすることで、自分に何が出来るのかを考えることができました。悩みを共有できる場でもあるのが SOBA の魅力でもあると改めて感じました。現場に出て関わることと、経験や事例について話し合い、じっくりと考え抜くことの両方が

学生である自分には必要だと感じました。

また、昨年度から引き続き不登校・学びネットワーク東海さんの活動にも参加させて頂きました。昨年度よりも多くの子どもが参加してくれたため、関わる機会も多く頂きました。自分も成長したのか積極的に関わる事が出来たと思います。実際に子どもと関わる中で自分の成長を感じることが出来たのはよかったです。

そして、今年度は発達障害について多く考える年でもありました。事例検討会では自分では思いつかないような意見をたくさん得ることができました。拡大学習会では実際の親御さんの話を聞き、今まで授業や本から得てきた知識とは全く違うことを教えられたように感じました。苦悩を抱えながら生きていく中で、様々な工夫や支えがあって子どもたちはすくすくと育っていくのだということがわかりました。発達障害のような見えない困難を抱える人にはよき理解者が必要であるように感じました。また、大学院の先輩の実習報告も非常に新鮮なものでした。施設の中で起こることは、将来的に自分が現場に出た時に近いことであります。その現場で感じたことを教えて頂けるのは非常にありがたかったです。

教育臨床カフェについても新たな取り組みを行うことが出来ました。まだまだ課題もありますが、将来現場を目指す学生の役に立つような企画を続けていけるといいです。

今年度は引越し等でなかなか上手くいかないことも多くありましたが、自分にとって成長を感じた 1 年であったと思います。残りの学生生活でも多くのことを吸収していけるよう、SOBA の活動からも多くの学

びを得ていきたいと考えています。

2015年の活動を振り返って

2年 伊藤江里奈

今年は二年生として、昨年度よりも自発的に活動することができたと思います。今年は私の属する臨床福祉心理コースからは新入生がおらず、養護教諭養成課程の学生がSOBAの活動に参加してくれました。そのため、ディスカッションの雰囲気や出る意見も昨年とは少し異なり、私自身も新しいことを吸収できたように思います。

また、今年は教育臨床総合センターの改修工事に伴い、活動場所の引っ越し作業がありました。そのために前期は思ったように活動をするのができなかつたのは残念でしたが、活動場所が教育未来館になったため、大学院の先輩方との交流が増えたのは、これからのSOBAにとって大きな資産になったと思います。大学院の先輩方のお話を聞く機会を得たり、SOBAの活動に参加して下さる先輩がいたりすることで、学部生だけでは得ることのできなかつた知識や、実地的な経験の話を聞くことができました。例えば発達障害についてのディスカッションをしている時も、先輩の教育実習の経験を踏まえて話し合いをすることができ、昨年に比べより現実的な解決方法を模索することができたと感じました。来年度以降も、教育未来館で活動が続いていく予定なので、ぜひ大学院の先輩方との交流を続けたいと思います。

反省点は、やはり前期にあまり活動ができていなかったことです。引っ越し作業だけでなく、人数が集まらなくて活動できない

日もあったので、少人数でもできる活動を考え、毎週活動したいと思いました。また、前期に見る予定だった映画『青い鳥』もまだ見ることができていません。ぜひメンバーの意見や感想も聞きたいので、早めに見る計画を立てたいです。

来年度に向けては、今年度と同じように大学院の先輩方と活動が出来るようにすること、様々な学科の新入生がSOBAの活動に興味を持って、参加してくれるような活動をすることを目標にして、今年度以上に精力的に活動したいです。

SOBAで1年を過ごして

2年 永田美里

この1年はあまりSOBAの活動にたくさんは参加できませんでした。また昨年とは違う立ち位置から参加することになり、戸惑うことが多かったように感じます。

2年生に上がりSOBAにも1年生が入り、私たち2年生はサークルを運営する側に立つことになりました。昨年の経験を活かしながらの挑戦でしたが、初めて直面することもあり、全てを経験でカバーすることはできませんでした。慣れないことやまだわからないこともあり、運営していくことの難しさを身をもって知った1年になりました。

とくにこの難しさを感じたのが教育臨床カフェです。私はスマホの使い方に関する臨床カフェのみの参加でしたが、カフェの進行を2年生で話し合い、実際にどんなものを提示していくのかを考えることになりました。先輩からの話を参考にしながらの活動でしたが、やはり私たちが主体となっ

での活動でしたので思うように進まないことが多々ありました。また開催の当日にプレゼンを発表することになりましたが、準備の段階からとても緊張し、当日は何を話したか記憶に残らないほどでした。昨年の臨床カフェでは先輩方の後ろに立ち自分が前に出ることがないように無意識にしていたことに気づききっかけになりました。

しかしこの1年は難しいことだけではありませんでした。1年生が入ったこともあり、また新しい見方の意見や感想を聞くことができました。また臨床カフェでは微力ながらも昨年より運営に関わったこともあり達成感もより一層増したものとなりました。

この1年で体験した難しさや戸惑い、もちろん活動をする楽しさ、おもしろさを大切な経験とし来年へと繋げていこうと思います。

SOBA の活動を通して

2年 別司真希

今年度は、教育臨床カフェにかなり力を入れた活動になったなと感じています。2年になって、SOBA で主体的に活動していく立場になって、ちょっとした進行役も経験しました。多くの学生と意見を共有できる場はあっても、院生の方々と交流する機会はなかなかないため、SOBA の活動はとても貴重で私にとってとてもプラスになっているように思っています。

例会では、発達障害関係の事例検討が多かったように思います。私はもともと発達障害には全く関心がなくて、知ってはいる程度でした。しかし、このような活動を通

して、発達障害のある子どもの抱える困難は本当に人それぞれで、同じ分類の障害だからと言ってそれを一つと考えてはいけないということを強く感じました。また、特定のことに困難を抱えていても、外部の理解や支えがあれば、みんなといっしょに学校生活を送っていけることを知って、支えていくための知識がもっと必要だなと考えるようになりました。実際に当事者（発達障害の子どもを持つ母親の会の方）のお話を聞いて、より発達障害を身近に感じるようになったし、もっと学びたい！という意欲がすごく増しています。今後、SOBA の活動はもちろん、個人的にも勉強していけたらいいなと思います。

来年度はより中心的に活動していく立場になるので、積極的にSOBA の活動に取り組み、学びの場を増やしていけたらなと思います。また、普段の活動、教育臨床カフェとより多くの学生に参加してもらるように頑張っていきたいです。

SOBA での1年を振り返って

2年 米阪朱里

今年度のSOBA の活動で印象に残っている出来事として、まず初めに臨床カフェが挙げられます。昨年度はほとんどお客様気分での参加でしたが、今年度は臨床カフェの企画に積極的に参加できました。それでもやはり、大学院生の方たちや先輩方に頼る部分の方が多かったのですが、運営する側の立場で臨床カフェに参加してみると、そこから学ぶことは質的にも量的にも昨年度とは大きく異なりました。

私が参加した臨床カフェは、大きく「SNS

と教育」と「発達障害」について取り上げ、それぞれイベントを開催しました。SOBAの普段の活動では臨床福祉心理コースの学生と養護教諭養成の学生とでしか交流が無いので、臨床カフェで大学院生の方や他のコースの学部生の方と意見交流出来たことは私にとって大きな学びとなりました。今後どのような活動をするかは分かりませんが、たくさんの方と交流できるこの取り組みは大事にしていきたいです。

もう一つ印象に残っている出来事として挙げられるのは、拡大学習会です。2回ほど行って私は1つしか参加できていないのですが、外部からゲストをお招きしてお話を伺うことはとても良い刺激になりました。ゲストの方には、発達障害を持つ子どもの家族の立場から様々なお話しをしていただいたのですが、当事者だけでなくその家族の気持ちや状況を学べたことは、私にとって新境地が開けたような感覚でした。SOBAの活動からは本当に学ぶことが多いです。

来年度は、実習に行く機会が増えると思うので、体験談として先輩方が話して下さったようなことを私も伝えられるようになればいいなと思います。それでSOBAのメンバーの学びに少しでもつながることが出来ればうれしいです。来年度もSOBAの活動頑張ります。

SOBAでの活動を振り返って

1年 尾崎天音

私は後期から隔週で例会に参加し始めたので、まだ数えるほどしか例会に参加していません。

しかし、その数回でも、ADHDや自閉症を抱える児童への対応を考えたり、院生の林萌さんによるひかりっこでの実習のお話を聞いたり実のある活動ができました。

在る問題を考える時、自分一人ではいくら考えても結局自分の枠にとらわれ体験しか思い付きません。しかし、SOBAではメンバーと意見を交換することで様々な視点から問題を分析して、答えを見つけていくことができます。しかもSOBAにはボランティアをされている先輩もいらっしやり、現場を知っているひとの意見を聞くことができることもSOBAの良い点です。

私は話し合いにおいてまだまだ新米で、薄っぺらな意見しか言えません。話し合いの場では意見があまり思い付かなかったのに、例会が終わったあとに次々と意見が溢れでることもあります。問題を突きつけられて、咄嗟に自分の意見を述べることができる力は今も将来も必要です。これからのSOBAでの活動を通して、このような力を養っていきたいです。

第Ⅲ部 資料

- 今年度第二回目教育臨床カフェで使用したチラシ

教育臨床カフェ特別企画

教室で使える！発達障害入門

プログラム
第一部：講演
第二部：グループディスカッション

11月11日(水)
13:30~16:00
参加費 **無料**

講師：飯塚一裕先生
(愛知教育大学障害児教育講座講師)

場所：愛知教育大学 多目的ホール
(教育未来館3階)

あなたの知らない臨床の世界

最近発達障害のある子どもの話題を耳にすることが増えています。あなたは発達障害という言葉を知り何を連想しますか？正しい知識を身に付けて、子どもたちとの接し方を一緒に考えましょう。今こそスキルアップのチャンス！

本事業は、平成27年度「発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業」の一環で開催されます。当日は簡単なアンケートにお答えいただくことがあります。よろしくお願いいたします。

●第一回目教育臨床カフェで使用した資料

スマホ利用の メリット デメリット

どのくらいの割合でスマホを持っているの？

小学生 39.3%
中学生 59.7%
高校生 96.1%
(2015年1月発表)



女子高生は1日当たり平均
7時間利用している！



未成年の携帯電話・スマートフォン使用実態調査(デジタルアーツ株式会社調べ)(2015)

メリット

- ・通信速度が速い。(従来のものより、よりPCに近い)
- ・情報の共有ができる。
- ・コミュニケーションの場になる。
- ・暇つぶしになる。



炎上報知器

NGワードを含む文章を投稿

・否定的なメッセージが寄せられる場合
・5分以内にリツイートが20を超える場合

警報!

防止することを目的として「たばこ」「盗撮」NGワードを、約400語登録。

デメリット

- ・依存してしまうことがある。
- ・寝付けなくなってしまう。
- ・勉強に集中できない。



- ・視力が下がる。
- ・課金トラブルが起こる。
- ・SNSによる対人関係のトラブル、いじめなどが危険視される。
- ・情報過多による取舍選択の困難性。



このマークは何のマーク？



スマホ依存が日常生活にもたらすもの

日常生活の満足度	友達関係	家庭生活	学校生活
低依存群	61.8%	58.5%	52.6%
高依存群	52.2%	41.7%	42.9%

ネット上での見知らぬ人とのやりとり	いろいろな人と知り合うのは楽しい	深刻な相談ができる	気が合えば実際に会いたい
低依存群	15.2%	5.2%	4.6%
高依存群	40.6%	14.3%	20.0%

スマホが手元ないと不安: 高依存
なくても不安ではない: 低依存

産経(東京)・朝刊
2015年1月31日(土)

あなたは答えにたどり着けるか？

検索力チェック！



ヒント！

- ①ある企業のロゴ
- ②「源」と書いてある
- ③和歌山県に関係している

正解



和歌山県を中心に展開している
スーパーマーケット、株式会社松源のロゴ。

まとめ

スマホで、全く知らない情報を引き出すことは意外と難しい。

私たちがいつも気軽に検索して得ている情報は本当に正しいものなのか、見極める必要がある。

おわり

【キッズクラブ 製作物など】(キッズクラブの活動詳細は本文をご覧ください)



□ キッズクラブへの参加:2016年1月9日(土)
10:00~11:30 刈谷市総合文化センターにて。
刈谷市による子育て支援事業(NPO法人子育て
子育ちNPOスコープによる運営)に、1回分の
プログラムを準備して参加。



□ 迷路 材料は、CD ケース、画用紙、モール、
BB 弾、ボンド、のりである。自分だけのステー
ジを考え、BB 弾の動きを予測しながら作製して
いた。



□ けん玉 材料は、紙コップ、わりばし、いら
ない紙、ひも、ビニールテープである。作ったけ
ん玉で楽しそうに遊んでいた。

空気砲での的当てゲーム



中野富士見中学校鹿川裕史君 いじめ自殺事件

概要

1986年2月1日、東京都中野区立富士見中学校2年の鹿川裕史君（当時13歳）が盛岡の駅ビル内のトイレで自殺をしたのが発見された。現場には「生きジゴク」などの言葉や生徒の氏名が記された遺書が残っていた。マスコミが大きく報道した最初のいじめ自殺事件であり、その後いじめ問題が社会問題として取り扱われるようになった。

行われたいじめ

- ・ 買い物に使われる
- ・ プロレスごっこ投げられ役（当時の生徒の話では「サンドバック状態」）
- ・ 服を脱がされる
- ・ モデルガンの標的役
- ・ イスと机で閉じ込められる

集団でのいじめ

葬式ごっこ

葬式ごっこについて

鹿川君のクラス内で行われたいじめ。鹿川君を死んだこととして色紙が書かれ机の上には飴玉やミカン、牛乳瓶にさした花が置かれた。色紙には4人の教諭の名前もあり事件後マスコミによって大きく取り上げられた。

遺書

遺書

「家の人、そして友達へ。
突然姿を消して申し訳ありません。くわしい事についてはA君とかB君とかにきけばわかると思う。俺だって、まだ死にたくない。だけどここのままじゃ「生きジゴク」になっちゃうよ。ただ俺が死んだからって他のヤツが犠牲になったんじゃ意味ないじゃないか。だから、もう君達もバカな事をするのはやめてくれ、最後のお願いだ。
昭和61年2月1日鹿川裕史」

学校の事件後

鹿川君の在籍していたクラスの隣のクラスのLが理科の授業中にNを殴る。Nは学校を飛び出し金物店に行ったところで教諭が追いつき口論になっていたところを警察が発見し事件が発覚した。Lは「先生が俺を止められるかどうか試したい気持ちもあった。」と語っている。

加害者側の事件後

- ・ 遺書で名指しされた生徒2人（A,B）はショックが大きく欠席が続き、1人は関西地方にある宗教団体の本山を訪れている。
- ・ 2人以外にも下痢症状が続き欠席がちになった生徒がいる。
- ・ 東京地裁はAとBに保護観察処分を言い渡した。
- ・ 鹿川君の両親は東京都、区、AとBの両親を相手に損害賠償請求を起こした。

考えたい点

- ・ 鹿川裕史君自殺事件がマスコミに注目されるようになった理由
- ・ 遺書に示された生徒A,Bであるが、この2人の名が示されるようになった背景

いじめが再度社会問題になり、今年（2015 年）には大学の地元愛知県内でも残念ながら悲しい事件が報道されている。

一方で、新聞やテレビで「いじめ」が論じられるときにどこか違和感を抱く人もいるだろう。誰もが「いじめの根絶」（問題解決）を訴えているが、実はそういった解決策に限界があるのではないか、あるいは問題のとらえ方自体が少しズレているのではないか……。そんな疑問を出発点に、問題の立て方自体を再考するとき、社会学のアプローチが役立つ部分がある。

「いじめ」の定義や統計に関する考察については、この報告書でも何回か触れてきたが、一冊にまとまった本はなかなかなかった。そこへ、ちょうど一年ほど前に社会学（教育社会学）の分野で「いじめ」と自殺を論じる 2 つの本が刊行された。リアルタイムの問題にどんなヒントが与えられるのか。今回内容を覗いてみたい。



北澤毅『「いじめ自殺」の社会学——「いじめ問題」を脱構築する』世界思想社、2015 年。

目次

はじめに

序章 「いじめ問題」とは何か——何をどのように問うべきか

第 1 章 「いじめ自殺」問題とは何か——「動機」と「原因」についての考察

第 2 章 社会問題とは何か——「いじめ問題」の構築主義的分析のために

第 3 章 「いじめ問題」の成立

第 4 章 いじめ定義論——定義活動のパラドックス

第 5 章 誰が「いじめ」を認定するのか——事実認定をめぐる攻防

第 6 章 「いじめ問題」と教師——いじめ事実の「発見者」から「定義者」へ

第 7 章 いじめられ経験の構造——いじめ定義の実践者としての子ども



伊藤茂樹『「子どもの自殺」の社会学——「いじめ自殺」はどう語られてきたのか』青土社、2014 年。

目次

第 1 章 子どもの自殺という社会問題（自殺とは何か；自殺への社会的アプローチ ほか）

第 2 章 「いじめ自殺」の発見（いじめによる自殺の「発見」；「いじめ」という概念の創出 ほか）

第 3 章 「いじめ自殺」のロジック（加害者／被害者という基本的構図；「いじめ自殺」における加害者とは誰か ほか）

第 4 章 消費される「いじめ自殺」（「いじめ語り」と自己；「いじめ語り」とアイデンティティ ほか）

第 5 章 「いじめ自殺」を超えて（いじめ問題の何を変えるべきか；いじめ問題の「オルタナティブ・ストーリー」 ほか）

1. いじめと自殺がセットになった時代

北澤と伊藤はそれぞれ違う著者であるから、当然両方の本に違いもある。だが共通して「いじめ」が社会問題として確立するとともに、「自殺」とセットで語られるようになった歴史を、報道内容などから検証している。「いじめ」が原因とされる子どもの自殺がはじめて注目されるようになったのは1980年代である。当初は新しい問題に対し手探りのような捉え方をされていたのが、ある時期から「いじめ」が自殺と直結するよう理解されるようになっていく。

北澤の本は、1980年代からの事件報道にさかのぼり、報道内容から微妙なニュアンスが切り落とされていく過程を丁寧に見ている。1980年9月に大阪府高石市で中学1年生が自殺をした事件では、新聞で「気の弱いいじめられっ子の自殺」と報道され、当時まだ「いじめ」だけで事件を説明することがあまり一般的でなかったことが示される。

この新聞記事で注目すべきは、『いじめられっ子』の自殺に「気の弱い」という修飾語が追加されていることである。ここには、「いじめ」だけでは自殺の原因としては弱く、「気の弱い」という性格特性があったからこそ「自殺したのだ」とする警察判断が観察できるように思われる。(北澤著 41 ページ)

しかし「いじめ」と子どもの自殺は次第にストレートに結びつくようになっていく。たとえば1985年1月に水戸市や岩手県で起きた中学生の事件は、「死を呼ぶ『いじめ』』という大きな見出しの下に2つそろえて報じられている。実はそれぞれの事件では、当初報道された遺書における「いじめ」の言葉が後に確認できなくなったり、「えん世」による自殺という別の見方が併記されて報道されたりするように、自殺をめぐる複雑さも垣間見られる。しかし新聞の本文の解説よりも見出しが影響力を発揮してしまうように、この時期には「いじめ」と自殺をセットで捉えるパターンができあがったようだ。

一方、伊藤の本はタイトル通り子どもの自殺の側から「いじめ」を扱っており、数多くの自殺のなかで「いじめ自殺」がクローズアップされてきた歴史をたどっている。かつては「勉学・受験による自殺」「哲学的な自殺」「不可解な自殺」など、子どもの自殺を理解する枠組みがいくつかあったが、いじめ自殺が盛んに報道されるようになると、「自殺といえはいじめ」のパターンが出来あがってしまう（確かに現在、子どもの自殺の報道では必ずと言っていいほど「いじめがあったかどうか、今後調べを進める」などのコメントが続く）。しかしかつては「受験苦」といえば自殺の理由が納得されていた時代もあるのだ。子どもの自殺は、注目を集める一方で、単純化された理解を受けやすいことが明らかにされ

ている。

2. 出来事からいじめ自殺までのプロセス（北澤著）

上で見たように「いじめ」と自殺が結びついて社会問題化したのが 1980 年代だと考えられる。そのパターンが今でも続いており、「自殺」という結果をなくすために「いじめ」自体を根絶せねばならないという論調に結びついている。そうした議論の問題点を指摘することが北澤の本の中心的内容である。ここからは、主に北澤著の内容を検討していく。

全体を簡単に要約すれば、図 1 のようになるだろう。ひとつの出来事が起こった時に、それをいじめと認識し、自殺に値する「いじめ苦」があるものと解釈する。それによって実際に自殺が遂行される。このような一連の流れによっていじめ自殺という現象が成立しているわけだが、実はこの流れの途中に「別の可能性」がある。まず出来事にはさまざまな捉え方があり、実は「これはいじめだ」といえるような単純な割り切り方はできないことが多い(①)。また「いじめ」は、自殺につながるような「いじめ苦」につながる必然性はない(②と③)。

しかしこうしたプロセスが固定的に捉えられることによって、周囲で「いじめ」を発見しなくてはならないとされる家族や教員、また自殺を選ぶ子ども本人を苦しめる結果になっていると主張している(以下、「発見の問題」「実行の問題」に分けて紹介)。

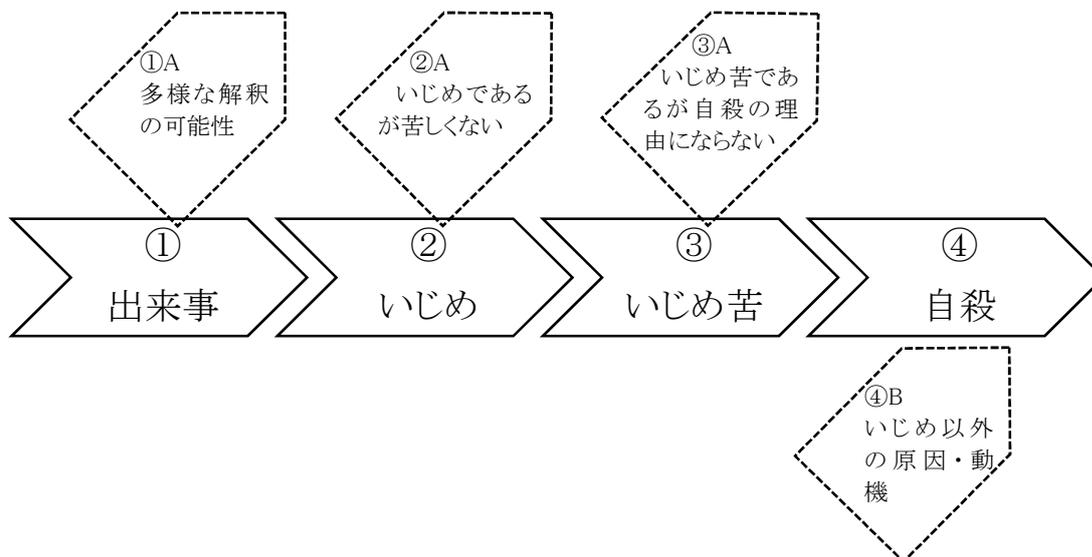


図1 「出来事」から「いじめ自殺」までの連鎖（北澤著の43ページ、図1-1を参考に作成）

【発見の問題】このような一連の流れから、第一に、子どもの周囲で「いじめ」を発見すべき人（家族や教員）は困難な問題に直面する。いったん「いじめ自殺」が起こってしまうと、「こんなことになる前に周囲はなぜ気づかなかったのか」「死ぬほどの苦しい「いじめ」があるなら気づいて当然だ」などの声が生じるのである。だが、これは一種の「結果論」である。つまりそういう結果になったことを知っている側は何とでも言えるが、そうなる前に「いじめ」や「いじめ苦」を見破るのは、そんなに簡単ではない。

厄介な問題は、ある出来事を「それはいじめだ」と誰もが一致して言い当てることができるだろうかということである。(略)「遊び」と「いじめ」、「いじめ」と「喧嘩」を明確に区別できるのだろうか。子どもが感じている「いじめ苦」をどうやったら理解できるのだろうか。本人が「いじめられた」と訴えればすべて「いじめ」になるのだろうか。こうした問いに、誰もが納得できるような答えがあるのだろうか。(北澤著 123-124 ページ)

「なぜいじめに気付かなかったのか」「なぜ自殺の SOS に気づかなかったのか」という非難の言説が、絶対的な正義の装いを帯びながら展開されることになる。しかし、この種の言説がどれほど事態を混乱させ、事件の当事者たちを追い詰めてきたかは滅多に語られることがない。(北澤著 19 ページ)

「いじめ」を語る人が一方的「正義」に立ってしまうことの弊害は伊藤著(135 ページなど)でも述べられている。こうした困難について、著書で直接解決策が示されているわけではないが、まずは、そうした場所から降りて語る必要があるのではないかということだ。

【実行の問題】第二はここで「実行の問題」と名づけておくが、実際に自分の経験を「いじめ」として捉え、死んでしまう子どもの問題である。北澤は、「いじめが死にたくなるほど苦しいものである」という「常識」が出来あがってしまうことで、むしろ実際に死を選ぶ子どもが存在するのではないかと危惧している。

子どもが自分の経験を「いじめ」と捉え、それが自殺に値する苦しみであると思えば、自殺を実行してしまえば、周囲の人間が子どもの経験をどのように理解していたとしても、手遅れである。また反対に、本人が苦痛を感じていないある状態が、第三者から見て「いじめ」と定義可能だとしても、本人がそのことで苦しんでいない限り自殺することはないし、あるいは苦痛を感じていたとしても、その苦痛を自殺に値する苦しみと思わない限り、その苦痛を動機として自殺することはない。(北澤著 137 ページ)

この考えから北澤の本では、「いじめ」を受けても自殺に値すると考えなくてもいいような捉え方を生み出すことを、結論部分で試みている(図の③A)。たとえば、将来の自分(「いじめ」がもう問題ではない立場)を想定し、その人を「相談相手」にするような子どもの試みが紹介されている。

3. いじめ自殺は、「いじめ」の最悪の結果なのか？(伊藤著)

大まかな内容を紹介してきたが、北澤の本にはいくつかの疑問も残る。北澤は上記の「発見の問題」「実行の問題」のうち後者を重視し、何とか「いじめ苦」が自殺に結びつくことを避けたいという思いがうかがえる。しかしそのためなのか、むしろ逆に「いじめ」と「自殺」が表裏一体であるという考えに著者が傾いているように思われるところがある。本の冒頭でも、次のように問題関心が示されている。

「いじめ問題」の最大の悲劇が「いじめ自殺」であるとすれば、「いじめ」を動機とした自殺をなくすことがまずは目指されるべきだということについては大方の同意が得られるだろう。(北澤著 2 ページ)

しかし、これに同意する必要はないのではないか。「いじめの最大の悲劇」は、必ずしも自殺とイコールではない。そのヒントが、伊藤の本の中に見つかる。伊藤は、「自殺に至りたいじめ」が、自動的に「死に至らせるほど深刻ないじめ」の結果ではないことを指摘している。たとえば、「いじめ」の加害者は「いじめ自殺」後に自殺の責任を問われてしまうことが多いが、もし「いじめ」が事実であっても自殺の責任まで全面的に負うべきだとは言えないのである。

「いじめの加害者=『いじめ自殺』の加害者」という図式は、一般に思われているほど容易に成り立つものではない。にもかかわらず、「いじめ自殺」が起こったときにはほとんど自明の真実のように扱われることになる。(伊藤著 97 ページ)

ここから、被害者についても同じことが言える。死を選んだ被害者は、半ば自動的に「いじめ苦」のゆえの自殺だと判断されてしまいがちだが、そうとは限らないのだ。

いじめの被害の軽重を客観的に量ったり比較することは困難ではあるが、ひどいいじめを受けながら自殺しない者がいることは間違いないし、そこまではひどくないいじめでも自殺する者がいることもまた事実であろう。だとすると、いじめの軽重と自殺するか否かは直接にはつながらないことになる。しかし、こうしたことは社会的には無視される。(略)「いじめ自殺」をした者は、ひどいいじめを受けていたのだから「死

んで当然」だし、そのいじめは最大級のものであったはずだ、と一方的に決めつけられるのである。しかし、自殺した者の精神世界においてこれ以外のプロセスが生じていた可能性はいくらでもある。(伊藤著 102 ページ)

同じように「いじめ」と「自殺」がセットになる経緯を追跡してきた北澤と伊藤だが、どこかで「自殺」が「いじめ」の大きさに比例して発生するという考えを北澤は受け入れてしまっている。そして何よりもいじめ苦のとらえ方を変えることで自殺が防げると主張する(上述 137 ページからの引用)。それに対し、伊藤は自殺の背景には「いじめ」以外の要素も含まれることを示唆する(図の④Bの部分)。自殺に至るには「いじめ苦」→「自殺」というルートを経由する必要はない。「いじめ」がなくても、あるいは軽度でも、やはり自殺に至ってしまうことも考慮しなくてはならないのである。

4. 「別の道筋」の可能性

北澤や伊藤の本の紹介を終え、ここからは、著書から学べることをまとめてみたい。2人の著者はそれぞれ「いじめ」から自殺に至るルートが一つではないことを示したが、そこから外れる可能性について必ずしも積極的に展開していないところがある(北澤は「いじめ苦」を変えることにこだわっているように思えるし、伊藤は「社会問題」としてのいじめ自殺に関心があり、学校現場などにおける解決策を示そうとしていない)。ここで図1に戻ってみると、①から④までのパターン化した流れから外れる「別の可能性」を、もう少し積極的に展開できる部分があるのではないかということだ。

たとえば①や①Aでは、いじめと呼ばれる以前に「もめごと」「けんか」「いざこざ」などの言葉で語るべきトラブルはたくさんある。現在、子どもが自分の靴を失くただけで「いじめ」という言葉を使うという小学校長の話聞いたことがある。人間関係のなかで起こりうるトラブルについて語る言葉をもっと豊富に身につけることで、自分たちで解決したり大人に相談したりするスキルを高める余地があるのではないか。「いじめ撲滅」が訴えられ、そしてトラブルの多くが「いじめ」と解釈されるのであれば、トラブルを経験しながら解決力をつけることはできなくなってしまう。

そもそも、何が「いじめ」なのか、喧嘩なのか、子どもたちにもよく分かっていない。そんな中で、「いじめはあってはならない」と言われてしまえば、何が「いじめ」なのか学習するチャンスも与えられない。小さなトラブルを経験することで「これは喧嘩だ」「これ以上やると『いじめ』になる」などの学習が必要だ。何が「いじめ」なのか確認しつつ、実際に深刻化する前に止めるという、「定義の教示と指導の一体化」のような教育活動が必要なのである。このことは、先ほどの「発見の問題」への解決策にもなる。つまり、教員が超能力者のように一方的に子どもの「心の中」を読み取るような責任を負わなくても済む。

次に②の部分である。「いじめ」的な被害が起こっているのに、それを苦痛と思わない可能性はあるだろうか。思うに、「いじめがある」と訴えることは誰かが固定的な加害者であり、また被害者であるということと結びついてしまっている。そのために加害者は絶対的な悪のように扱われかねないし、被害者は暗く惨めな存在であると受け止められる。つまりそれぞれがスティグマ（負の烙印）を与えられてしまう。今の状況で「いじめ」と「いじめ苦」を切り離すのは難しいだろう。

それに対し伊藤は、「いじめ」を「自然現象」や「災害」のように、人間的な現象ではなく無機質に語ることを示唆している（伊藤著 171 ページ）。心理療法の分野で言われる「外在化」という技法に近いだろう。「誰のせい」なのかという議論を招く言葉ではなく、「いじめ」的加害・被害が子ども期（それも思春期前期）に避けて通れないことを認識し、淡々と対処する可能性を検討できないか。大人社会の「ハラスメント」という言葉の定着やガイドラインの制定は、それに近い可能性を含んでいるように思われる。

最後に、③A や④B について。北澤や伊藤の本には、「いじめられた」と認識する子どもが自殺という選択肢に進むことを何とか食い止めたいという隠れた思いを感じるのであるが、幅広い事実を踏まえれば、心配するポイントが少しズレているのではないか。前号の報告書などで触れたことだが、「いじめ」に関する統計の件数は自殺に至った例に比べはるかに多い。逆に、小学生から高校生までの子どもの自殺の中で、「いじめ」を背景とするものは1.8 パーセントに過ぎない（文部科学省「子供の自殺等の実態分析」2014 年）。もちろん出来事の解釈の多様性を踏まえてこうした統計を理解しなくてはいけないが、「いじめ」と自殺をイコールで結ぶように考える現状において、こうした数字がもっと知られるべきだろう。実際に自殺を遂行する前には、「うつ」などのメンタルヘルスの問題を抱えている人が多いことも知られている。

北澤や伊藤の本は、「いじめ」が自殺に値しないと宣言することで「苦痛」自体も解決すると論じているように読めなくもない。しかし「いじめ」と名づけるかどうか、また自殺を選ぶかどうかにかかわらず、苦痛自体には名前をつけ、対処する必要がある。自殺を含めてメンタルヘルスの知識が普及することは、それこそ「最大の悲劇」を避けるために必要なことなのではないか。

おわりに

川北稔（教職実践講座）

「はじめに」にもある通り、教育臨床総合センターおよび SOBA の活動が行われていた教育総合棟の建て替えのため、SOBA の活動もいったん場所を移動することになった。引っ越しや新しい場所での活動のため、例年に増して SOBA について大学内のいろいろな教職員の方々に相談に乗っていただいたり、協力していただいたりした一年だった。

学校教育臨床専攻の先生や大学院生との協力による「教育臨床カフェ」の企画も 2 年目に入った。SNS やスマートフォンに関する企画内容は、現代の学生が生きる時代を反映している。また発達障害に関する関心はここ数年の SOBA の特徴になっており、教育臨床カフェでも学内の先生を招いた講習が実現している。SOBA の拡大学習会で、家族や支援者の立場に関わる NPO の方に来ていただいたことも、多面的な学びにつながったのではないだろうか。

私自身は教職大学院（教職実践講座）において、教員を目指す大学院生との付き合いが続く一方、SOBA や教育臨床カフェは、福祉や心理の仕事を目指す学部生や大学院生、また指導する先生方とも交流できる場である。学校、家庭、地域など幅広い背景から子どもを見ることは、将来の職種に関わらず、対人援助の仕事をするうえでよい経験になるだろう。また、学生時代に双方の職種の志望者が顔を合わせることは、お互いの共通点や得意分野を知る上で早道かもしれない。その意味で、教員志望者と福祉や心理職を目指す学生の交流が SOBA の場で少しずつ見られるようになったことには希望を感じる。

今年度の SOBA や教育臨床カフェに共通することであるが、教育未来館という建物での活動は、大学内の目立つ場所に位置しているために新しい可能性があるように思った。来年度以降どのような形になるのか未知の部分はあるが、今年度の経験をきっかけに、大学内外で存在をアピールできるような活動を期待したい。

一方で、長らく続いた教育総合棟 2 階の「ミーティングルーム」での活動は、ついに幕を下ろした。SOBA が活動を始めた場所にも別れを告げたことになり、個人的には大掃除が終わったような気持ちと、思い出の残る品を十分段ボールに詰められたのか、若干の心残り感がある。また活動のうえでも、欲を言えば新旧の場所の良いところを合わせたような空間が理想なのかもしれない。物理的には限界もあるが、学生の自発的な学びや交流が発展する場の在り方を考えていきたい。

今後とも SOBA へのご支援、ご指導をよろしく申し上げます。

SOBA 活動報告書 第 13 号

編集・発行 愛知教育大学教育学部附属教育臨床総合センター
〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1 番地

SOBA 連絡先

FAX 0566-26-2713

E メールアドレス empower@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

ブログ「soba の活動」 <http://d.hatena.ne.jp/soba2525/>

発行責任者 愛知教育大学 教職実践講座 川北 稔
SOBA 代表 伊藤 江里奈

表紙絵 海野 由希子
伊藤 梨香

発行 2016 年 3 月